

令和四年度入学者選抜学力検査追試験問題

国語

(配点)

1	30点
2	36点
3	34点

(注意事項)

- 1 問題冊子は指示があるまで開かないこと。
- 2 問題冊子は一ページから二十ページまでである。検査開始の合図のあとで確かめること。
- 3 検査中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気づいた場合は、静かに手を高く挙げて監督者に知らせること。
- 4 解答用紙に氏名と受験番号を記入し、受験番号と一致したマーク部分を塗りつぶすこと。受験番号が「0(ゼロ)」から始まる場合は、0(ゼロ)を塗りつぶすこと。
- 5 解答には、必ず**H Bの黒鉛筆**を使用すること。なお、解答用紙に必要事項が正しく記入されていない場合、または解答用紙に記載してある「マーク部分塗りつぶしの見本」のとおりマーク部分が塗りつぶされていない場合は、解答が無効になることがある。
- 6 一つの解答欄に対して複数のマーク部分を塗りつぶしている場合、または指定された解答欄以外のマーク部分を塗りつぶしている場合は、有効な解答にはならない。
- 7 解答を訂正するときは、きれいに消して、消しくずを残さないこと。

次の文章は、作家白洲正子と日本文化史研究者目崎徳衛の対談の一部である。これを読んで、後の問いに答えよ。

目崎 (注1) 芭蕉は五十歳で亡くなりました。

白洲 (注2) 西行より二十歳以上早いわけですね。

目崎 だから、あと二十年生きていたらどうであったかと、山本健吉さん(注3)はしょっちゅう言っておられた。芭蕉は、有名な辞世の句、「旅に病んで夢は枯れ野を駆け廻る」というのを詠んで、これも現世への執着であると芭蕉が悔やんだ、ということを書き留めていますが、返す返す悔やんだというんですね。つまり五十歳の段階では、死にかかっているのに、まだ自分をつかまえようと探している。

ところが、西行のほうは、芭蕉より二十年以上も生きるわけですから、最後のところは完全に芭蕉がこだわっていたものを飛び越えてしまっているわけです。

白洲 西行の場合は、最後は歌うこともよしてしまっていますものね。

目崎 すべて歌いきったということかもしれませんね。芭蕉の場合は、あれからまだ九州へ行こうとしていたわけで、いわば無念の挫(注4)セツであったわけですから、余計にそういう思いが強かったのかもしれないですね。ただ、だからこそ私には西行よりも芭蕉のほうが近く感じられるといいますか、西行の高みになってしまうと、やはりうかがい知れない、という思いにとらわれてしまうんです。白洲さんのように、私も西行のあとを全部歩いてみれば、西行のほうでも私に近づいてきてくれるのかもしれませんが、なかなか歩くこともできませんのでね。

白洲 ところで先生、人はなぜ旅をするのでしょうかね。

わたくしは、寂しいというか、ものの哀れみたいなことを感じるのだと思うんです。そういうチャンスは、家にいただけではなかなか感じられない。それにいろんな人にも会えますしね。

目崎 私は日本人の旅(注5)というものは二つの種類があるのではないかと思うんです。一つは、「舟の上に生涯をうかべ」と芭蕉も書いているんですが、世の中を動いて回るのが生業だという人たちがいます。とくに中世は定住しない人たちが非常に多かったです。

例えば、(注6)ギョ民、海女、船人、こういうような人たちで、移動することが仕事である人ですね。こういう人は定住地を持たない。

白洲 職人のなかにもそういう人たちはおられますね。例えば、漆を塗る職人、塗師もそうです。こういう人たちは、今でいうパレットみたいな漆板と漆を塗るへらを見せれば、どこの塗師屋でも泊めてくれたそうです。そこで何日か泊まって修業をして、それから、またよそへ行くというようなことで、いろんな技術も伝えられたんです。

陶器の世界でもそうです。伊万里と九谷が非常によく似ていて、時には、どつちがどつちだか、よくわからないのも、九谷の陶器を伊万里の人が

作っていたのかもしれませんが。

目崎 当然そういう人たちは旅をしたからといって、歌に詠んだり、紀行文を書いたりはないわけで、いわば無名の語らざる旅人だったわけですから。もう一つは西行とか芭蕉に代表されるように、仮に定住地を持つていても、現世を生きること自体が旅である。こういうことをよく自覚して、それを思想として打ち出した人。そういう二つの旅の形があると思います。その二つが、密接に連関しながら、今日までできているといえると思います。近代になりますと、<sup>(注5)</sup>三木清が『人生論ノート』の中で次のように言っております。

「何処<sup>どこ</sup>から何処へ、といふことは、人生の根本問題である。我々は何処から来たのであるか、そして何処へ行くのであるか。これがつねに人生の根本的な謎である。さうである限り、人生が旅の如く<sup>ごと</sup>感じられることは我々の人生感情として変<sup>かわ</sup>ることがないであらう。いつたい人生において、我々は何処へ行くのであるか。我々はそれを知らない。人生は未知のものへの漂泊である」。

白洲 ああ、人生は未知のものへの漂泊ね。

目崎 それと同時に「出発点が旅ではない、到着点が旅であるのでもない、旅は絶えず過程である。ただ目的地に着くことのみを問題にして、途中を味<sup>あじわ</sup>ふことができない者は、旅の心の真の面白さを知らぬものといはれるのである」。こういうことも言っています。

白洲 <sup>(4)</sup>お能の橋掛りや、歌舞伎の花道にしても同じことです。

目崎 私などはまだ未熟ですから、人生の意味がどういうところにあるかということとは言えませんが、考えてみますと、あくせく馬車馬のように働くだけではしょうがない。もう少しゆとりのある人生を送りたい、そう考えるものですから、みんな、なんとなく旅にაცოგაれるのではないか。そういうふう<sup>(5)</sup>に思ってみたりするんですけどね。

白洲 人生というのは、どこまで生きても完結はありませんし、旅と一緒でございますね。

目崎 同じ旅といっても、何か目的があつて、計画を立てて、予定通り行つて用を済ませ、それで終わりというのは本当の旅とはいえないのかもしれませんがね。

白洲 ところで、西行の歌に、

「年たけて又越ゆべしと思ひきや 命なりけりさやの中山<sup>なみやま</sup>」

というのがありますね。これは西行六十九歳のときの歌なんです。四十年以上も前に初めて小夜<sup>せや</sup>の中山を越えた日のことを思い出して、激しく胸<sup>(5)</sup>に迫るものがあつたんだと思うんですよ。その長い年月の経験が、積もり積もつて、「命なりけり」の絶唱になつたんじゃないでしょうか。

目崎 二度とこれないかもしれないという思いもあつたでしょうね。

白洲 それもあるでしょうけど、命という言葉は非常に重たい言葉でね、その一言の中にみな、入っているんじゃないでしょうか。自分の命も、人の命も、生死みたいなものもね。

目崎 なるほど。

白洲 わたくし、小夜の中山峠に行ってみて、びっくりしちゃってね。今はわけなく越えられるんだけど、昔は大変なことだったので、戦前は。今はもう、峠を越えるという、ああいう苦しみがなくなるのは悲しいことです。

それでね、さつき先生が三木清の言葉を引用されましたが、人生は旅と同じで、その日その日が大切なんだと思います。お寺の参道も花道や橋掛りとまったく同じことですね。参道を車で通過して、お寺へ乗りつけるのは、あれはまったく意味のないことです。

目崎 そうですね。参道を歩くうちにいろいろ思うことがあつたりしましたね。

白洲 お釈迦様は「中有」ということをおっしゃいましたが、人生はほんとに、旅の途中だと思えますね。

目崎 百まで生きてても、百五十まで生きてても、完結することはないんです。必ず人生は途中でプツンと切れるわけですから、三木清の言う通りだと思います。

白洲 小林秀雄さんは『モオツアルト』の中で、「大事なものは目的ではなくて、現在の歩き方だ」と言っているのも同じことでしょうね。

わたくし、比叡山の回峯行も取材をしたことがあるんですが、例の阿闍梨になるためのものですね。この最後のほうでは一日に八十五キロも歩くというものすごい修行があるんです。それがすむと、今度は断食でございまして、見ているほうは大変だな、よく続くな、と感心してしまいます。

それで、わたくしが、もつとキョウウ味<sup>③</sup>があるのは、たしかにもものすごい修行ですけれども、それを済ませたときに安心をしようと駄目なのね。

目崎 ああ、われながら大したもんだ、と。

白洲 そう。そう思っちゃう人は、そのあとガタ落ちになってしまうんです。

目崎 阿闍梨になることが目的ではないということですね。

白洲 阿闍梨になったあとも、ずっと何かの形で修行を続けていかななくてはならない。ひどいのは自慢げにコウ演<sup>④</sup>をしたりしている人もいますから、そういう人は完全に墮落してしまうことになるんですね。

目崎 修行は一生だということですね。しかも、一生かかっても終わるといことがない。

白洲 <sup>⑥</sup>それが「生きている」ということでしょう。

目崎 人生は歩き続けなくてはいけない、というのが結論ですね。

(白洲正子『日本の伝統美を訪ねて』による)

(注1) 芭蕉 || 江戸時代前期の俳人。 (注2) 西行 || 平安時代後期の歌人。 (注3) 山本健吉 || 一九〇七〜一九八八。評論家。

(注4) 辞世の句 || この世を去る前に詠む和歌や俳句などのこと。 (注5) 三木清 || 一八九七〜一九四五。哲学者。

(注6) 釈迦 || 仏教の開祖。 (注7) 中有 || 仏教で、人が亡くなってから次の生を受けるまでの間。

(注8) 小林秀雄 || 一九〇二〜一九八三。評論家。

(注9) 回峯行 || 比叡山で行われる僧の修行。 (注10) 阿闍梨 || 仏教の教えの一種である密教で、秘法に通じた僧のこと。

問1 本文中の、控セツ、ギヨ民、キヨウ味、コウ演 のカタカナ部分の漢字表記として適当なものを、それぞれアからエまでの中から一つ選べ。

① 控セツ ア 切 イ 節 ウ 折 エ 接 ② ギヨ民 ア 魚 イ 御 ウ 漁 エ 暁

③ キヨウ味 ア 経 イ 興 ウ 教 エ 協 ④ コウ演 ア 交 イ 後 ウ 功 エ 講

問2 本文中の、の と同じ用法のものを、次のアからエまでの中から一つ選べ。

ア 絵を描くのが好きだ。 イ 学校の友だちと遊ぶ。 ウ 言ったの言わないのもめた。 エ 母の書いた手紙を読む。

問3 本文中に、そういう思い とあるが、どういうものか。その説明として最も適当なものを、次のアからエまでの中から一つ選べ。

ア 死を目の前にしてもなお自分をつかまえようとする現世へのこだわり。

イ これから行こうとしていた九州への旅を断念するしかなかった悲しさ。

ウ 現世への執着を捨て去ってよりいっそう信仰を深めたいという願い。

エ すべて歌い切ったという充足感を書き残しておきたいという気持ち。

問4 本文中に、日本人の旅というものは二つの種類がある とあるが、その説明として最も適当なものを、次のアからエまでの中から一つ選べ。

ア 移動しながら技術を学び職人としての成長を目指すものと、移動の中で得た思想を表現することで人としての成長を目指すもの。

イ 仕事としての移動に過ぎず心情を書き残すことのないものと、生きていくこと自体を旅としてとらえつつ思想を表現するもの。

ウ 移動に時間が割かれるため旅の思想を表現できないものと、現世を生きること満足してそれを思想として表現できるもの。

エ 定住を望んでも仕事の都合で移動し続けるしかないものと、定住しながらも日常生活の中に旅としての要素を探し続けるもの。

問5 本文中に、お能の橋掛りや、歌舞伎の花道にしても同じことです。とあるが、どういうことか。その説明として最も適当なものを、次のアからエまでの中から一つ選べ。

ア 橋掛りや花道が舞台裏から舞台に至る通路の役割を持つように、ものごとの始まりと終わりを正確に見たうえで途中経過を十分に味わうことが、最も価値ある生き方になるのだ。

イ 舞台と舞台裏をつなぐ場である橋掛りや花道の上を通る役者が華やかに見えるように、ものごとは結果を重視するだけでなく、過程の華やかさも含めた全体を味わうことが大切だ。

ウ 橋掛りや花道が舞台の表と裏をつなぐ重要な場所であるように、ものごとの出発点と到達点をはっきりと意識することによって、ものごと全体の意味を味わうことができるのだ。

エ 演者が舞台に向かう途中の橋掛りや花道での場面が芝居の見所となっているように、ものごとはある地点にたどり着くことだけが問題なのではなく、過程を味わうことが大切だ。

問6 本文中に、激しく胸に迫るものがあつたとあるが、<sup>(5)</sup>どういうことか。その説明として最も適当なものを、次のアからエまでの中から一つ選べ。

ア 難所である小夜の中山峠を年老いた身で再び越えるつらさと、多くの人々がこの峠を苦勞しながら往來している姿を重ね合わせて、深い共感を覚えた。

イ 難所である小夜の中山峠で命を落とすかもしれない恐怖と、多くの人々がこの峠を乗り越えてきた現実を重ね合わせて、困難に立ち向かう決心がついた。

ウ 難所である小夜の中山峠を初めて行き来したときの懐かしさと、この峠を人々が気軽に行き来できるようになった現状を重ね合わせて、感慨深く思った。

エ 難所である小夜の中山峠に年齢を重ねた自分が再び来た感慨深さと、長年人々が過酷な峠を命がけで越えてきたことを重ね合わせて、感無量になった。

問7 本文中に、それが「生きている」ということでしょうとあるが、<sup>(6)</sup>どういうことか。その説明として最も適当なものを、次のアからエまでの中から一つ選べ。

ア 人生は旅や修行の苦しさに耐えながら問題を乗り越えていくことが重要で、墮落したとしても再び歩き出せばよい。

イ 人生は一生かけても終わることのない修行であり、目に見える形での目標に到達したことに満足するものではない。

ウ 人生はどれだけ現世への執着を持ち続けられるかということが大事であり、ひたすら歩き続けることが必要である。

エ 人生は目的地を目指す旅のようなものであり、先々の計画を立ててそれにしたがって過程を楽しむことが大切である。

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

疑似科学は、曲がりなりにも「科学」と称する以上、見かけは科学的なデータにもとづいた主張である。したがって疑似科学の錯覚は、自然や人間を対象とした観察や実験の中で発生し、成長していく。(注1)このプリミティブな実例を考えてみよう。

世界中いたるところに、ひとつの「迷信」がある。古代文明から現代までのあらゆる時代に、日本であろうがアフリカであろうが、たいていの場所にその迷信はあった。

それは、「雨乞いをする」と、雨が降る」というものである。

この迷信にもとづく雨乞い行事は、程度の差こそあれ、干ばつの脅威をかかえた農業文明のあるところ、広く存在している。

むしろ、科学的には雨乞いで雨は降らない。(1)にもかかわらず、世界中の人類が、なぜ揃いもそろって、雨乞いについて誤った信念を見いだし、それを保持してきたのか？

宗教的な儀式という説明もあるだろうが、心理学の知見から最も蓋然性の高い説明はごくシンプルである。(注2)

それは「雨乞いしたら、本当に雨が降った」から。

そう、必死で雨乞いをする、その願いが通じたかのように、やがて雨に恵まれるという現象が頻繁に起こるのである（正確には「認知される」のである）。いや、冗談ではなく、本当に。

たとえば、私の住む長野県にも長年受け継がれた雨乞い祭りがある。その伝承では、一五〇四年に大干ばつがあり、村人は困り果てて、村にそびえる霊岳に雨乞い祈願をしたという。すると、なんと恵みの雨が降ったのだ。これに感謝した村人は祠ほこらを建て、九頭竜権現くずりゅうごんげんをお祀りまつするようになったという。

こうした伝承の多くは信仰と一体化しているものの、「雨乞いをする」と、現実には雨が降った」というのは、客観的に観察された事実であることに注目してほしい。

ここで、この信念の由来を考えるため、雨乞いの検証方法をちよつとマジメに考えてみよう。

もし、小学生が夏休みの自由研究で「雨乞いの効果」を科学的に研究しようとしたならば、どうアドバイスするだろうか？「そんなものあるわけないだろう」と科学的好奇心の芽を摘むようなことはいわれないとして。

となると、おそらくこうではないか。

まず、一日に一回、サイコロを振って偶数の目が出ればその日は「雨乞いをする」、奇数が出れば「しない」ことにしよう。もしくは偶数日はして

表 1

		雨が降った	雨が降らなかった
雨乞い	あり	A	B
雨乞い	なし	C	D

奇数日はしなくてもいいよ。そして、一か月間、そのとおり実行して、実際にその日に雨が降ったかどうか、毎日記録しよう。そうすると、表 1 のようなデータが集まるね。そこから雨乞いをした場合には何日雨が降ったか、しないときに何日降ったかわかるね。

科学に親しんだ人ならば、こんな実験をして 2×2 の四分割表 (表 1) にまとめるよう提案するだろう。

夏休み中は雨の日も晴れの日もあるだろうから、雨乞いをして雨が降ったこと (A) があっても、それだけでは、雨乞いの影響なのかわからない。そこで、A から D の四種類の頻度が必要になる。たとえば、雨乞いをして雨が降った確率と、しないで雨が降った確率を求め、その間に違いが認められて初めて両者の関連を読み取る前向きな根拠になる。

こうした四分割表は、ふたつの事象の関連性を分析するための基本かつ定番手法である。たとえば新薬の効果を知るためには、その薬を処方して回復した人の割合だけでなく、<sup>(注 3)</sup> 処方しない (偽薬・プラシーボを処方) 場合の回復率と比較対照を行うのはご存じだろう。「比較対照群」の設定は、科学の方法論の中でも最重要なもののひとつである。

この雨乞いのケースでも、条件間で降雨確率を比較すれば、統計的誤差の範囲内で効果があるとはいえないと判定されるはずだ。

しかし、人を感じるリアリティは、こうした論理的な正しさとは異なる。私たちの素朴な観察は、すべての頻度を公平に見比べるようには働かない。注意を引き付けるのは ① のみ。「雨乞いしたら雨が降った」ことに、おそらく最も強い心理的インパクトがある。

それはそうだろう。だって日照りが続いて困り果てているとき、必死で天に祈り、生け贄<sup>にぎ</sup>まで捧げたら「本当に降った」のだ。それは間違いなく強烈な印象を残し、記憶に刻み込まれ、さらには地域の人々に長く語り継がれるだろう。

一方、雨乞いなしでも降った ② はどうか。これはただの日常である。③ も雨乞いの必要がない程度の晴天というだけで、簡単に忘れ去ら

れる。こうした比較対照となるデータこそが真の効果を正しく評価するために必須なのに、ほとんど注意をひかず記憶に残らない。加えて、④ の

失敗例は、現実世界では最も認識されにくいケースである。いや、事実上存在しないに等しい。ふつう雨乞いは雨が降るまでやる、だけのことである。

このように、素朴な観察では印象に残る共生起 (あり・あり) 事例だけが偏って記憶に刻まれる。「雨乞いしたら、<sup>(2)</sup> ホントに雨が降ったんだから!」というまぎれもない事実こそが、強い心理的リアリティを持つのだ。こうして私たちは、<sup>(2)</sup> 実際には存在しない関係性であつても、客観的な観察から「発見」してしまうのである。

雨乞いとよく似た状況を扱った心理学の研究に、ドライアイスをまいて人工降雨を起こそうとした気象実験データを被験者に見せたものがある。実際には、この五〇日間のデータは散布と降雨の関連性がないように作られていたにもかかわらず、多くの被験者が、散布して雨が降ったという例に注目して「効果あり」と判断する傾向が見られたのだ。



このように、ふたつの出来事に全く関係がないか、もしくは弱い関連性しかないのに、そこに関連性を見いだしてしまう錯覚は「錯誤相関」や「幻相関」と呼ばれている。そして、この仕組みが、何もないところに何かを見つけたしてしまう疑似科学の萌芽となる。

「水にありがとうといったら、きれいな結晶ができた」「地震雲を見たら地震が起こった」「ひねくれたあの人は、ホントにB型だった」。これらはいずれも、ただの妄想や虚偽というわけではなく、実際の経験的データにもとづいている。ただ、惜しむらくは、そのデータ収集や解釈が素朴すぎた。観察が印象深い事例に引きずられることに注意せず、比較対照を考えずに系統性を欠いた観察を行い、目立つ例から誤った解釈が引きだされたのだ。

この「素朴さ」が疑似科学的方法論的な特徴であり、この後に説明するさまざまな認知バイアスにそのまま重なることを、ちょっと覚えておいていただきたい。

人の錯覚を認知の欠陥のせいで片づけるべきではない。この背景には、私たちが限られた経験から効率的に推論を進める認知システムが働いているのである。

私たちの日常的な認知の中で、ふたつのできごととの関連性についての推論は間断なく行われている。起床時間と遅刻の関係、乗る電車と座れる可能性、自分の言葉遣いと取引先の態度……。私たちは常に事象の関連性を推測して、行動や判断の手がかりに利用している。

この推論を厳密かつ公正に行うためには、四分割表のような手順が必要である。しかし、日常生活の中で、そんな系統的な比較が可能だろうか？

すべての条件のデータを揃えるのはまず不可能に近いだろう。できるとしても、果てしなく面倒なはずだ。「さまざまな言葉遣いを試してみ、取引先担当者の機嫌がどうなるか」を、系統的に実験する人はまずいない。現実には、「不用意ないい方をしたら、激怒した」というたった一回のインパクトある共想起事例から、相手が言葉遣いに厳しいことを素早く「発見する」能力を、人は持っている。

このように、ふだんの私たちは、限られた特徴的な情報のみから素早く結論を引きだす簡便な思考方略をとっている。これがヒューリスティクスと呼ばれる日常のデフォルト的な思考である。おかげで、私たちは、<sup>(3)</sup>「おおよそ実用的に問題のない判断を短時間のうちに行えるのだ」。しかし、その能力を持つがゆえに、現実には存在しない対象であっても、ごく自然に「発見してしまう」のである。

考えてみれば、錯誤相関は、雨乞いだけでなく、私たちの身の回りに数多く発生していることに気づく。たとえばジंकスの類が<sup>(注5)</sup>そうで、バッテリーボックスに入る前に必ずある動作をするとか、勝つたらユニフォームを洗わない高校球児<sup>(注6)</sup>というのもこれだ。この手の<sup>(注5)</sup>ゲン担ぎは、皆さんにも心当たりがあるだろう。

また、社会心理学者たちは、こうした錯誤相関が、偏見や人種差別などにつながると考えている。たとえばアメリカでさかんに研究されたのは、人種的マイノリティのような目立つ集団が犯罪行為を行うと、その例のみが強く認識され、人種と犯罪の間に錯誤相関が生じてしまうことだ。類似のプ

ロセスは日本でもある。日本の少年の凶悪犯罪は、昔に比べても・諸外国に比べても、きわめて少ない。にもかかわらず、最近ではキレる若者の犯罪がとも増えていると思ひ込んでしまう人がいる。これも、比較すべき情報に眼を向けず、目立つ特徴的な例（特にマスコミ報道）のみが認知されるために起こる錯誤相関の例である。

こうした迷信や誤信、偏見といったものも、客観的な観察を根拠に現象を理解するという科学の素朴な思考に、少なくとも外見は沿っている。「雨乞いしたら雨が降った」「この服を着たらラッキーだった」、そして「凶悪事件の犯人は、間違いなく少年だった」。これらは、まさに動かしがたい客観的な事実であるからこそ、錯覚を誘うリアリティを持つのである。

認知「バイアス」とは、人が情報を公平に処理せずに、一定の方向へ歪んだ認知情報処理を行う現象である。錯覚や錯誤は、この認知バイアスの結果として発生する。

数ある認知バイアスの中でも、広汎に見られ、かつ強力なことが知られているのが「確証バイアス」である。これは、簡単にいえば、人は現在持っている信念、期待、理論、仮説、予想を支持し、確証する情報を求め、反証となる情報の収集を避けたり、利用を失敗する傾向を持つことである。

たとえば「あの占い師、すごく当たるんだってね」と聞かれれば「へえ、どれくらい当たったの？」と応じるだろう。「へえ、どれくらいハズシているの？」とはなかなかならない。人は「当たる」という期待を確認しようとし、反証例や否定的な例を探そうとしない。

人がこうした傾向を持つことは古くから知られており、フランシス・ベーコンがイドラ（正しい思考を妨害するもの）のひとつとして指摘しているものだ。いわく、人の知性は、一度仮説や期待、思ひ込みを持つと、その仮説に拘束され、仮説が切り取るように世界を認識する。そして、仮説に合致しない例は、無視したり排除するなどして当初の仮説を守り抜こうとするという。

そして、この確証バイアスが、疑似科学の理論形成に非常に重要な役割を果たす。なぜなら、この働きによって、たとえ誤った発見であっても、その正しさを確認する科学的証拠が自動的に探しだされ、その結果、信念がどんどん強化されてしまうからである。

確証バイアスによって起こる情報の歪みは、大きくふたつに分類できる。

まず、多くの情報の中から、自分の考えに適合するもののみを無意識のうちにピックアップするもので、いわば量的な確証バイアスである。もうひとつは、あいまいで多義的に解釈できる情報や、材料不足で解釈できない情報から、仮説に一致する解釈を導きだすもの、これは質的な確証バイアスとしておこう。

これらのバイアスを働かせて、私たちは、自分に都合がいいように世界を切り取っているのである。そして、たとえトンデモない仮説であっても、日々観察する膨大な事実の中から、それを確認する情報を選択的に見つけたし、有利に解釈をすることができるのだ。

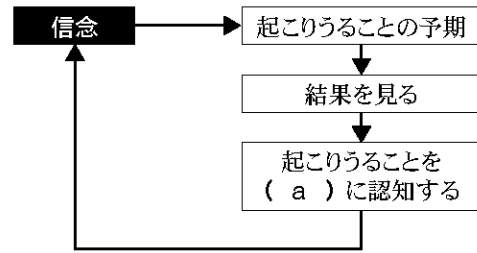


図 1

たとえば、「血液型B型の人ひねくれている」という（データラメな）仮説を胸に秘めて、身の回りの人の行動を観察してみよう。すると、この仮説に合致する確証データは、驚くほど何人も発見されるはずだ。もちろんA型でもO型でも、ひねくれた行動はあるのだが、なかなか注意をひかない。そもそも仮説ではB型の人に注目しているからだ。もし、そうした反証例に気がついたとしても「たまにはそういう人もいるよね」と例外化されて重要性を低く認識されてしまう。

また、性格という概念は複雑な側面をもち、多様に評価することができるため、誰にでも多少は「ひねくれた」と解釈できる行動はある。それを期待をもって見ることで、B型に限ってそのひねくれ度が強く解釈されることになる。

こうして、B型にまつわる誤信念は、たくさんの「思い当たるフシ」によって強化され、それがまたバイアスがかかった観察を生むのである。これが確証ループによって信念が成長していく過程である（図1）。

科学研究では自分の予測にあわせて作想的にデータを選択することは不正行為と見なされる。しかし、人の認知システムは自覚がないうちに、予測に合わせたデータのトリミングや歪曲を行っているのである。

（菊池聡「なぜ疑似科学を信じるのか 思い込みが生み出すニセの科学」による）

（注1）プリミティブ素朴な。（注2）蓋然性＝予測や推定などをする際に、多分そうだと考えられる可能性の程度。

（注3）処方しない（偽薬・プラシーボを処方）場合＝新薬の効果を判定するため、それと外形等が全く同じ偽薬（プラシーボ）を処方すること。

（注4）デフォルト＝あらかじめ設定されている標準的な状態。（注5）ゲン担ぎ＝縁起をかつぐこと。

（注6）トリミング＝不要な部分を取り除いて整えること。

問1 本文中の、曲がりなりにも、惜しむらくは <sup>(a)</sup> の意味として最も適当なものを、それぞれ次のアからエまでのの中から選べ。

- (a) ア 誤解ではあるが イ 風変わりではあるが ウ 強引ではあるが エ 不十分ではあるが  
 (b) ア 残念なことに イ 困ったことに ウ 愚かなことに エ 面倒なことに

問2 ①～④には表1のA・B・C・Dのいずれかが入る。①～④に入れるのに適当な記号（A・B・C・D）を、それぞれ一つ選べ。ただし、同じ記号は二回使わない。

問3 図1の（ a ）に入れるのに最も適当な語を、次のアからエまでの中から一つ選べ。

ア 自動的      イ 客観的      ウ 選択的      エ 日常的

問4 本文中に、科学的には雨乞いで雨は降らない。とあるが、<sup>(1)</sup> どうか。その説明として最も適当なものを、次のアからエまでの中から一つ選べ。

ア 雨乞いによって雨が降るといふ事実があったとしても、科学的に説明するのは困難だ。  
イ 科学的には証明できないが、雨乞いによって雨が降ったという伝説は確かに存在する。

ウ 雨乞いをする事と雨が降る現象との間には、科学的な意味での関連が認められない。

エ 長年受け継がれた宗教的儀式としての雨乞いには、科学研究の素朴な形が認められる。

問5 本文中に、<sup>(2)</sup> 実際には存在しない関係性であっても、客観的な観察から「発見」してしまう とあるが、どうか。その説明として最も適当なものを、次のアからエまでの中から一つ選べ。

ア 人は強く印象に残る観察事例に注意を引き付けられると、公平な比較対照からは導き出せないような関係性をそこに読み取ってしまう。

イ 人の観察は素朴で偏ったものになりがちだが、客観的な観察を心がければ、表面には表れない関係性でさえも掘り起こすことができる。

ウ 人が感じる心理的リアリティにもとづいて観察するならば、存在しないとされていた関係性が実は存在することに気付くことができる。

エ 人はまぎれもない事実を観察すると、それを引き起こした何者かの存在を想像することで、超自然的な関係性を勝手に見出ししてしまう。

問6 本文中に、<sup>(3)</sup> おおよそ実用的に問題のない判断を短時間のうちに行える とあるが、どうか。その説明として最も適当なものを、次のアからエまでの中から一つ選べ。

ア インパクトのある共生起事例を組み合わせて、有用な情報のみを認知することで、あらゆるデータを比較対照するよりも正確な検討を行える。

イ さまざまな出来事との関連性を系統的に検討するのではなく、限られた情報から即座に結論を引き出すことで、日常生活に役立つ推論ができる。

ウ あらゆる出来事との関連性を長期間にわたって観察しており、簡便的な思考方略によって、最終的に実用性のある判断を手取り早く行える。

エ すべての条件のデータを揃えることが不可能な場合でも、非常に限られた経験から、まったく新しい情報を素早く見つけ出すことができる。

問7 本文中に、<sup>(4)</sup> 自分に都合がいいように世界を切り取っている とあるが、どうか。その説明として最も適当なものを、次のアからエまでの中から一つ選べ。

ア 確証バイアスにとらわれて誤った事実を発見したり、自分の利益に反する情報を無視したりして、自分にとって役立つ関連性だけに目を向け

ようとすること。

イ 複雑な側面を持つ概念を無視したり、多様に評価することができている情報を歪めたりして、本当は存在しない事実をまるで存在するかのよう  
に認知すること。

ウ 自分の考えに適合しない情報を切り捨てたり、解釈が不能もしくはあいまいな情報を歪めたりすることで、自分の予測通りの情報を取り上げ  
ようとすること。

エ 迷信や偏見といったものを避け、日常生活のなかで観察できる膨大な事実を適宜選り取りることによって、自分の仮説を科学的に証明しようと  
努力すること。

3

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

夏佳は水泳に励んでいたが、父の転勤で何度も転校していた。今の町に来て二年目、中学三年生になった時、ギターを弾く霧野十太が転校してき  
て、夏佳は次第に十太を気にかけるようになる。その夏、水泳の地区大会で二位に入った夏佳は、その泳ぎに注目した強化校のマネージャーからスカ  
ウトされ、強化校への転校を勧められるが、迷っていた。そんなある日、夏佳と十太は、同級生の秋穂から、神社の盆踊りに行こうと誘われた。

夏佳は十太の後ろにつき、人混みの中をあてもなく歩き回る。途中、浴衣を着た秋穂が踊っているのを見つけた。その周りも秋穂の友達らしく、  
揃って浴衣を着ている。夏佳が手を振ると、秋穂はこちらに気付いて手招きした。それには首を振って遠慮する。踊るのはちょっと恥ずかしい。秋穂  
がつまらなそうにむくれて見せるから、ごめんと頭を下げる。

結局、境内の奥にある岩に二人で腰掛けた。小さな本殿が鎮座しているその脇、人気の少ないところから喧騒を眺める。

「夏佳は祭り、好き？」

十太が尋ねてくるので、

「賑やか過ぎるのはあんまり好きじゃない。」

と答える。すると十太が「俺も。」と呟く。

夏佳はそれがどうにもおかしく思えて、ぶつと笑ってしまう。

「何で笑う。」

「……だって、好きじゃないのにお互い盆踊りに来てる。」

十太はむくれたように口を尖らせ、そっぽを向いてしまう。それがまた面白い。

賑やか過ぎるのは嫌だけど、静か過ぎるのも寂しいのだ。不器用でわがままで、それでも本心なんだから仕方ない。

十太とぼつりぼつりと会話を続ける。会話が途切れても、盆踊りの曲と人々の雑踏が沈黙の間を快く過る。盆踊りの人の輪には入り込めなくても、心のどこかにいつもある劣等感は見当たらない。今の夏佳はやはり一人ではなくて、それがとにかく嬉しかった。

「最近、泳ぎは順調？」

ふと十太に尋ねられる。夏佳は慌てて我に返る。

「え、あ、うん。ほちほちかな。この前の大会も記録よかったし。」

そう言っつて、心がすんと冷めた。東京の強化校からのスカウトを思い出したのだ。夏佳はまだ答えを出せていなかった。十太は夏佳の目の色の変化を見逃さない。

「どうしたの？」

そう首を傾げるから、夏佳は口を開いてしまう。

「大会で、東京の……。」

「東京？」

十太が夏佳を真つすぐ見つめていた。何の気もないことは分かっていたけど、夏佳は心が揺らいだ。

「……いや、何でもない。」

夏佳は言葉を濁した。もしスカウトのことを話して、十太に応援されてしまったら。そんなことを考えて、怖くなってしまった。

「そんなことより十太は最近どうなの？」

「え、俺？」

夏佳が聞き返すと、十太は真顔で呟く。

「……曲、作ってみようかなって思ってる。」

「え、すごい。」

「すごいくない。」

十太は顔色ひとつ変えず、首を横に振る。でも少しだけ照れているように見える。

「完成したら聴かせてよ。」

「……分かった。」

十太は小声で言った。秘密の約束のようでもくすぐったかった。

薄闇の向こうから声を掛けられた。

「夏佳と霧野君、こんなところにいた。」

ひょこりと現れたのは秋穂だった。後ろにはクラスメイトの姿もちらほらある。二人でいる姿を見られ、少し落ち着かない気持ちになるが、秋穂は特に気にしていないようだ。

「一緒に参拝しよー！　ここ、神社なんだし。」

秋穂に促されて夏佳は立ち上がる。十太も後ろからついてくる。クラスに溶け込んでいるとはいえない夏佳と十太だが、今は夏の蒸した空気に浮かされ、クラスメイトの中に自然と収まることができた。

そのまま本殿へ向かう。その途中、秋穂が夏佳の耳元で囁いた。

「おまじないの話、知ってる？」

そういえば、そんな話を小耳に挟んだ気がする。「詳しいことは知らない。」と夏佳が言うと、秋穂は嬉々として話し出す。

「同じ事が三回願われると、三回目ではそれは叶うっておまじないがあるんだよ。」

「……どういうこと？」

夏佳が首を傾げると、秋穂は意味深な笑みを浮かべてこちらを見た。

「例えば、夏佳が霧野君と付き合いたって願ったとする。」

「へっ？」

変な声が出た。そんなのじゃない、と夏佳が言い返す前に、秋穂が「例えばの話だって。」と笑う。が、その表情には夏佳をくすぐるような流し目が伴っている。

「まず夏佳がそう願う。で、次に私が霧野君と付き合いたって願う。」

「そ、そうなの？」

「だから諭え話だつて。」

秋穂が宥めるもの、夏佳は気が気でない。秋穂は自分で言い出しておきながら少し面倒臭くなっている。

「で、最後に、……ああ、もう誰でもいいや。じゃあ、吉田先生が十太と付き合いたって願ったとする。そうすると、三回目の願いが叶って、晴れて吉田先生は霧野君と結ばれる。」

ふてぶてしく立つ担任、吉田先生が十太の隣に。

「ええ……。」

「嫌だね……。」

秋穂も思い切り嫌そうな顔をしている。どうしてこうなってしまったのか。

「どうかした？」

十太がぱつと振り返ったので、夏佳と秋穂は咄嗟に目を合らし、「何でもないよ。」と首を横に振った。だが我慢ができずに笑ってしまう。十太の怪訝そうな顔が、本人には悪いがまた面白い。

何だか、こんな感覚は初めてだった。

気張らずに、悪目立ちせず、普通に、人の中に溶け込んでいる。それがこんなに楽で心地よいものだなんて知らなかった。孤独というのは手放しても許されるものだと初めて知った。

本殿の前に辿り着く。二礼二拍手一礼に則って、それぞれが頭を下げる。秋穂に変なおまじないを吹き込まれて何を願っていいか分からなくなつた夏佳は、十太の方をちらりと見る。

十太は迷いなく頭を下げている。夏佳は無性に気になってしまい、その気持ちを振り払うように自分も頭を下げる。

でも、何を願えばいいのだろう。夏佳は今、<sup>3)</sup>どうしようもなく満たされていて、まるで言葉が出てこない。

いつもは、もつと速く泳げますように、と願っていた。初詣でもそう願った。そしてそれは叶いつつあった。強化校へのスカウトはその大きな足掛かりだ。ずっと憧れていたオリンピックピックという舞台が、少しか夏佳へ近づいた。それはわずかな距離だけど、夏佳にしてみればそれでも大き過ぎた。

<sup>4)</sup>憧れを抱え続けてきた今までの自分に報いるべきだ。ずっと泳いできた意味を見出すべきだ。強化校へ入るといふ選択をするべきだ。そうしなければいけない。分かっている。

……ずっと分かっているのに。



『十太と一緒にいられますように。』

そう願っていた。

「夏佳？」

秋穂が、頭を下げ続ける夏佳に呼び掛けた。慌てて顔を上げる。

今、泳ぐことを諦めてしまったらどうなるんだろう。そんな空想をしていた。

<sup>a</sup>遠くで雷が鳴った。

家へ着いても、遠雷が続いていた。

<sup>b</sup>結局、雨は降り出さず、人々は空に不安な目を向けつつも踊り続けた。夏佳と十太も秋穂たちに連れ出され、最後の曲だけは踊ることになった。恥ずかしかつたが、ほんの少しだけ楽しいと思つた。人に溶け込む感覚は人生で初めてだったかもしれない。

玄関に入った頃には夜九時を回っていた。父はまだ仕事から帰ってきておらず、母だけが迎えてくれた。

夏佳はすぐにシャワーを浴びた。熱帯夜の粘っこい汗を流す最中、先程の祈りを反芻した。(注)はんすう自分は東京へ行くという決意ができないのだ。水泳に身を捧げることができない。シャワーは慰めの雨のようだった。なぜ慰められているかは分からなかった。

寝巻で洗面所から出る。玄関に繋がる廊下は少しだけひんやりしている。

ピンポーン。

インターホンが鳴った。父だった。夏佳はそのまま玄関の土間に降りて鍵を開ける。ドアが開き、父の姿が現れる。

「おかえ……」

夏佳の言葉は押し潰れるように途切れた。

父がどこか強張った、神妙な表情を浮かべていた。

その瞬間、夏佳はすべてを察した。

「ただいま。……転勤が決まった。」

遠雷が響いていた。

夏佳はただ「そっか。」と呟く。その表情がよほど崩れていたのだろうか。父は少しだけ慌てたように言葉を継ぐ。

「聞いてくれ。今度は東京だ。東京に戻るんだ。だから強化校にも心置きなく通える。」

東京。その響きは夏佳の心をぐしゃぐしゃにした。父は夏佳に笑い掛ける。よかっただろ？ そう語り掛けているように見える。

「それは、私が決めなきゃいけないかったことだよ。」<sup>(5)</sup>

夏佳は呟く。身を翻し、玄関からリビングへ戻る。母が「どうしたの？」と心配そうな声を上げるが、それを無視して二階へ上がる。

そういえば大会からの帰り道、父は「ゆっくり考えなさい。まだ九月前だしな。」と呟いていた。あれは転勤のことを言っていたのだ。父の銀行の辞令は三月か九月に出る。東京への転勤ということは、もしかしたら出世なのかもしれない。でも、それは自分に関係ない。

夏佳は自室に入る。階段からの光で、鮮やかな青色がわずかに反射する。

十太のピック<sup>(注4)</sup>だった。

強い雨に降られたあの日、手にねじ込まれた水色のピック。

十太。一人にしないで。

どうしてこんな気持ちを抱いてしまったんだろう。どうせいつかは引越して別れるのに。分かり切ったことだったのに。心を許し過ぎてしまった。まだ遠雷が聞こえる。重い響きが胸に直接届く。暗くなった夜空の奥で、気配だけを漂わせている。姿は見えないくせに、音は力強い。目を閉じると、その音がまるで近づいてくるように思える。

抗えないまま、夏佳に押し寄せようとしている。

(あおばゆう 凧に溺れる) による

(注1) 喧騒⇨物音や人の声でやかましいこと。

(注2) 怪訝⇨わけがわからず不思議に思う様子。

(注3) 反芻⇨繰り返し考えて味わうこと。

(注4) ピック⇨ギターを弾くとき使う小片。

問1 本文中に、意味深な<sup>(1)</sup>笑み とあるが、「意味深」は四字熟語を省略したものである。「意味深」の「」の「」を補うために最も適当な漢字を、次のアからエまでの中から一つ選べ。

ア 兆    イ 長    ウ 調    エ 超

問2 本文中に、その表情には夏佳をくすぐるような流し目が伴っている。とあるが、このときの秋穂の様子<sup>(2)</sup>の説明として最も適当なものを、次のアからエまでの中から一つ選べ。

- ア 夏佳と十太が秋穂に変に遠慮しているように見えたので、おまじないの話で夏佳をけしかけようとしている。
- イ 夏佳がひそかに十太と約束を交わしたことを知っていて、秘密を知っていることをほめかそうとしている。
- ウ 夏佳と十太がお似合いなので少しだけ邪魔をしたくなって、夏佳の内心を言い当てる驚かせようとしている。
- エ 夏佳が内心十太にひかれていと思うって、おまじないの話をするついでに夏佳を少しからかおうとしている。

問3 本文中に、夏佳は今、どうしようもなく満たされていて、まるで言葉が出てこない。とあるが、なぜか。その説明として最も適当なものを、次のアからエまでの中から一つ選べ。

- ア 友人の輪を遠くから眺めていただけだった自分が、その一員になれたことがとてもうれしく、十太に好意を伝えることもできそうに思えて、未来が希望にあふれているように感じているから。
- イ もっと速く泳ぎたいという願いが叶って大会でいい成績をおさめただけでなく、強化校にもスカウトされて、願っていたよりもずっと幸せなことが次々と起こっているように感じているから。

ウ 十太や秋穂と話しながら、クラスメイト達の中に自然に溶け込んでいることに自分でも意外なほどの気持ちよさを覚えて、ずっと抱いていた孤独な気持ち<sup>(3)</sup>がなくなつたように感じているから。

エ 初めて神社の盆踊りに参加して、気になる友人とも距離を縮められ、これ以上頑張らなくても自分が自分らしくいられることに気づいて、縛られた立場から解放されたように感じているから。

問4 本文中に、憧れを抱え続けてきた今までの自分に報いるべきだ。……見出すべきだ。……選択をするべきだ。とあり、「……べきだ。」という文末表現が三回繰り返されている。その表現効果の説明として最も適当なものを、次のアからエまでの中から一つ選べ。

- ア 命令口調を用いた表現を繰り返し用いることで、それが自分の意志でなく他者から強制された行為であることを強調している。
- イ 正しいはずの決断を促す表現を繰り返し用いることで、実際は決断することができない登場人物の心情を強調している。
- ウ 適切な行動を例示した表現を繰り返し用いることで、時間の経過に伴い意志が固まっていく心理の変化を強調している。
- エ 彼女がそうするはずだと予期する表現を繰り返し用いることで、今後の展開が予想を裏切るものとなることを強調している。

問5 本文中に、それは、私が決めなきゃいけないことだよ。とあるが、ここでの夏佳の様子<sup>(5)</sup>の説明として最も適当なものを、次のアからエまでの中から一つ選べ。

ア 強化校に通うべきかどうかを夏佳なりに悩んでいたのに、自分自身で答えを出す前に東京に引越すことになり、それを父が夏佳にとつてもいいことであるかのように言ってきたことに対して反発している。

イ 栄転で東京に戻るのを喜んだのは父の方なのに、夏佳のために引越すような言い方をされ、家族の希望をかなえてあげたと言わんばかりにふるまう父の恩着せがましい口調に対して強い嫌悪を感じている。

ウ 夏佳は転校するつもりなど全くなかったのに、いつも父の都合で引越しを強いられるばかりいることでとうとう我慢できなくなり、せめてこの機会に少しは自分の不満をわかしてもらいたいと思っている。

エ 強化校に入ることを喜ぶほどには水泳に没頭できていない夏佳の悩みを知らないのに、勝手に東京への転勤を決めてきた父の行動に対して、どうして自分の意見を聞いてくれなかったのかと暗に責めている。

問6 本文中の「雷」の効果について話し合った次の会話文の①④に当てはまる本文中の破線部a～eを、それぞれ一つ選べ。ただし、同じ記号は二回使わない。

生徒1 この文章の後ろの方には天気に関する表現が多いよね。神社の場面から、家に帰った後の場面にかけて、繰り返し天気に触れているよ。

生徒2 前の方、神社の場面の末尾には①とあって、夏佳が家に着いた後に②とあるよ。雷が鳴っても雨は降っていないのね。

生徒3 ②は比喻表現だね。家の中の場面だし。

生徒1 何か意味ありげだね。ショックを受けた時に雨が降ったり、雷が落ちたりするのは、漫画やドラマでも見るよね。

生徒2 そうか、じゃあ「雷」は夏佳の不安を表しているのかな。

生徒3 未来への不安とか、そういうこと？ 確かにこの話の「雷」には、何か意味が込められている気がするね。ただの天気の写真ではなくて。

生徒1 でも神社で夏佳は「どうしようもなく満たされて」いたでしょう？ その続きで雷が鳴るのは、夏佳の不安の表れではないかな……。

生徒3 ①とあるからには、雷の音は遠いよね。後の方でもずっと鳴り続けているのを見ると、何かの前触れとか、そんな感じはしないかな？

生徒2 なるほど。盆踊りの場面からずっと雷は鳴り続けているわけか。確かにそんな感じがするね。

生徒3 それなら遠雷の「音」が重要なんじゃない？ 夏佳が父の転勤と引越しの決定を聞いた後の部分でも③と書いてあるし。

生徒1 そこは雷の音が夏佳に迫ってくる感じの表現だね。実際の雷が近づいてくるとは書いてないけど、確かに音が重要そうな書き方だ。

生徒2 夏佳は引越しにショックを受けているから、天気が夏佳の心理を表すなら、③の場面で「雨」が降ってもよさそうだけど、それはないみたいだね。

生徒1 盆踊りの描写として、前に④とも書かれていたし、家に戻ってから雨は降っていそうにないね。

生徒3 きっと大事なものは、天気そのものというより、雷の「音」の方だよ。何かが迫ってくる感じを、鳴り続ける遠雷の音で表現したかったんだと思う。穏やかじゃないっていうか。

生徒1・生徒2 なるほど。

a 遠くで雷が鳴った。

b 結局、雨は降り出さず、人々は空に不安な目を向けつつも踊り続けた。

c シャワーは慰めの雨のようだった。なぜ慰められているかは分からなかった。

d 強い雨に降られたあの日、手にねじ込まれた水色のピック。

e 目を閉じると、その音がまるで近づいてくるように思える。

問7 問6の会話の内容をふまえて、本文中の「雷」の効果に関する説明として最も適当なものを、次のアからエまでの中から一つ選べ。

ア 思ってもみなかった喜びを見出した夏佳が急激に方針を転換したこと、夏佳と十太の未来が変わっていくことを暗示する効果。

イ せっかく友人と仲良くなれたと思っていた夏佳に、仲間たちとのつらい別れという突発的な不幸が訪れることを暗示する効果。

ウ 申し分ない生活を送っているように見えていた夏佳の環境に、実際には以前から家族間の根深い問題があったことを暗示する効果。

エ 自分の居場所を見つけかけたように感じていた夏佳に、自分の意思ではどうにもならない運命が近づいていることを暗示する効果。